

中村幹夫教授送別の辞

加藤 尚之

東邦大学医学部化学研究室准教授

中村幹夫教授は1977年に東邦大学医学部化学研究室に助手として着任され、35年間教育・研究にご尽力されてきました。着任当時、「毎年英語の論文を一報は出す」と言ってタイプライターで論文を書いて（打って）いたのが印象的でした。1980年に東邦大学医学部・海外留学規定が実施され、第1回の海外留学生としてミシガン大学に留学されました。当時はパソコンや携帯メールなどない時代ですから、近況を知らせる手紙を研究室一同楽しみにしていたことを思い出します。ミシガン大学の研究室のボスから与えられたテーマは、「活性中間体の化学モデルの合成として鉄(IV)ポルフィリンラジカルカチオンの合成の研究だ」と手紙に書いてありました。その時はわれわれがやっている研究テーマと違うこともあり、よく分かりませんでした。帰国後東邦医学会での発表を聴き、また詳しく教えていただきました。今になれば私の生体無機化学の講義にも役立っています。帰国後の5年間はずっと研究されていた物理有機化学の研究を再開されていましたが、医学部に核磁気共鳴(nuclear magnetic resonance: NMR)装置が導入されたことで、これまでの物理有機化学から独自のテーマを追究するべく生物無機化学へ方向転換されました。先生にとっては大きな決断だったと思います。新たな研究テーマとしてシトクローム**b**モデルを考えて研究を始められました。もともと研究がお好きで探究心旺盛な先生ですので大きな問題ではなかったと思いますが、それでも一人で研究をされていまして結構大変だったようです。そのような状況の中で1991年に教授に昇任されました。教授になるといろいろな役職が回ってきますので、ますます研究の時間が減ってきますが、1993年に転機が訪れました。それは、東邦大学大学院理学研究科の教授を

兼担され、理学部から卒業研究生や大学院生を採ることができるようになったことです。これによって先生の研究が一気に進んだことを思い出します。先生曰く、「不安に思ったときに良いことがある」だそうです。さらに1996年に総研に新たなNMRが導入されたことで、「これで世界に挑戦するという気持ちを持って研究することができる」と強い決心を抱かれたそうです。実際にそれ以後、多くの素晴らしい研究成果を発表してこられたことは周知の通りです。先生は日本より海外でその研究が高く評価されています。2003年にはフランスのレンヌ大学に招待教授として赴かれていますし、国際学会で多くの招待講演や特別講演を行われています。また国内外で学会の役職を多数歴任されており、東邦大学の名を国内外に広めることに貢献されてきました。

学内では、学生部次長を通算10年、フレッシュマン・キャンプの責任者を6年間務められました。また温厚で責任感の強いお人柄は、一般教育責任者を2003年から9年間務めてこられたことにも表れています。

中村先生は最終講義の最後に、「Where observation is concerned, chance favors only the prepared mind」というパスツールの言葉を1年生に贈り、「将来素晴らしい医師として研究者になって欲しい」と話されました。私はこの言葉に中村先生が歩んでこられた42年間の研究・教育に対する姿勢を垣間見ることができました。

最後に35年間本当にお疲れ様でした。定年は一つの区切りでもあります。でもそれは中村先生にとって通過点に過ぎないでしょう。今後もますます教育・研究にご活躍されることをお祈り申し上げるとともにご趣味を見つけて第二の人生を楽しく過ごされることを願っております。